

# めくもりほっとぷれす

NUKUMORI HOT PRESS

発行 NPO法人傾聴グループ  
めくもりほっとらいん  
代表 山上 敏枝  
〒264-0029 千葉市若葉区桜木北2-26-30  
TEL 070-4369-7269  
FAX 043-214-8397  
http://www.nukumorihotline.org/  
編集責任者 吉野 秀子



式典の冒頭で山上理事長は「今日までメンバーは創設の理念を継承して活動してきました。めくもりの活動を支えてくれたすべての方々に感謝申し上げます」と挨拶し、来賓のちばコープ県本部の式島良子様は、「めくもりの活動は誰一人取り残さないSDGsの精神そのもので、多くの人に寄り添い、勇気を与えてこられた。コープのビジョンの一つ『共の力で笑顔の明日を』と同じ思いだ」と挨拶された。

一期生の矢野久美子さんからのお花が入り口で来場者を迎え、会場ではあたたかい雰囲気の中、ゆかりのある方たちとの再会を喜び合う光景が見られた。

「開会」とらいんは、2004年10月1日に傾聴電話相談をスタートさせてから20周年を迎え、11月23日習志野市モリシアホールにて記念の会が開催された。

悩み苦しむ方と共に育ちあう関係を目指し20年



めくもりほっとらいん  
20周年記念の会



の方々に感謝申し上げます」と挨拶し、来賓のちばコープ県本部の式島良子様は、「めくもりの活動は誰一人取り残さないSDGsの精神そのもので、多くの人に寄り添い、勇気を与えてこられた。コープのビジョンの一つ『共の力で笑顔の明日を』と同じ思いだ」と挨拶された。めくもりの設立に尽力された永井雅子様からは「20年続けるのは簡単じゃなかった。たゆまぬ努力と仲間と共に乗り越えてきたことを誇りに思ってください。電話でつながった方に代わってありがとうございます」とのことばを頂戴した。

## 映像上映

「万葉集に背中をゆだねて」  
そのビデオの中で渡邊先生の設立時の心境が明らかにされた。

## 記念講演

続いての記念講演（次頁掲載）は慶應義塾大学の小倉先生の研究内容に参加者は心を揺さぶられた。

「設立当時、電話相談という新しい世界に踏み出すということに対して賛否両論ありました。二年かけて何度も話し合いを重ねました。話しくたくして疲れた頃にふと万葉集のこの歌がうかんできました。  
熟田津(にきた)に  
船乗りせむと月待てば  
潮もかなひぬ  
今は漕ぎ出でな  
海に船出することた  
めらつてゐる私たちに、  
月は満月、潮は満ちているよと誘いかけていますよ

## 傾聴劇

午後にはメンバーのふくみ劇団が先生監修の元に創り上げた傾聴劇「電話室の一日」を披露した。



## シャンソン



歌声に感動!



らの事例を思い起こしながら引き付けられた。



15年ぶりの再会となった小倉先生と渡邊先生

恒例のマイク回しでは、ゲストの方から近況などとともにめくもりの更なる活動を祈念する声にメンバーは励まされた。最後に全員で「今日の日はさようなら」を合唱し、記念の会は閉幕となった。

# 体験の非共有性はいかに乗り越えられるのか

## —原爆体験の継承の現場から考える—



講師：小倉康嗣氏  
慶應義塾大学文学部  
人文社会科学教授

20周年記念の基調講演を行うにあたり、15年前に第1回「ぬくもり講座」でお話くださった小倉先生に講演をしていただいた。

先生は13年前から、広島市立基町（もとまち）高校で2007年から始まった「次世代と描く原爆の絵プロジェクト」を追いかけている。

このプロジェクトは基町高校美術部の生徒が課外活動として、被爆者が被爆証言をする時に使用する場面の絵を描くという取り組みである。

先生は絵を描いた高校生、被爆者、絵の指導をした先生、そして高校生の卒業後を追いかけ、それぞれのライフストーリーをインタビュしている。高校生は被爆者と1年近く何度も対話を重ねながら1枚の絵を描いている。対話の積み重ねから描かれた絵には被爆者と高校生のたぐさんのライフストーリーが込められているという。

はじめに  
「(1)原爆体験の継承と「共に生きる」」

先生ははじめに、大学での取り組みを話した時の学生の感想を紹介した。

「他者と全く同じ体験をすることはできない。他者を本当の意味で理解することはできないという状況は、原爆体験の継承に限らず、あらゆるコミュニケーションにおいて起こり得る。」

そして多様性の尊重が謳われる現代において、この「分らないさ」は人々の不干渉を生み、そのせいで私たちは孤独を感じたり、他者を無視したり、傷つけることさえある。

この問題は、分からないことでも、それをできる限り分かつとすることによって解決に近づくことができる限り分かつとすることとはどういうことなのか。基町高校の『原爆の絵』の活動がその具体的な例であると感じた。

そもそも継承とは何か、何を何のために継承するのかという問いを先生は私たちに投げかけた。

具体的には基町高校で行われているプロジェクトを事例に、『原爆を体験したことも見たことも

ない高校生が、なぜ、どのようにして、被爆者がリアルに感じられる原爆の絵を描けるのか」という問いを通して考えていきたいと話した。

(2)被爆体験の風化という問題の内実

今、存命被爆者の高齢化という問題だけでなく、「核廃絶」「平和の尊厳」といった「ヒロシマ」にまつわる常套句が、儀礼的に繰り返され、唱えられることで形骸化し、人を揺り動かす力が失われていっているという。

1. 広島の高中生が描く『原爆の絵』…どんな取り組みなのか

(1)高校生が描いた『原爆の絵』とその経緯

ここから、高校生が描

いた何枚もの絵がスクリーンに映し出された。

高校生が絵を仕上げるために被爆者の話を何度も何度も聞き、当時の被爆者の生活、気持ちに思いを寄せ、何度も書き直し、よりリアルな絵を描こうとした葛藤などのエピソードが語られた。

(2)絵を描いてもらった被爆者の声

A この絵を見るとね、昨日のことのように感じるんです。

B あの時の血のにおいまでするような。

C 私の気持ちが伊藤さん（自分の絵を描いてくれた高校生の名前）に乗り移って、伊藤さんの心が私の心になって、共感してもうた。そのように感じる。

D この絵だけじゃなくて、私の人生いうのを、こんななかでかなり話しますから。（中略）それだから、本当のような絵が出てくるのねえ。

E（もし正確に写しとった記念写真があったとしても）絵がいい。

2. 『原爆の絵』を描いた高校生たちは何を体験しているのか

ここで先生は具体例としてインタビュした高校生たちの声を紹介しながら、高校生たちが体験したことを伝えてくれた。

(1)追体験

絵を描いたひとりの高校生は被爆者の話を目の前で初めてきた時に言葉にならないほどの「ぶわー」という感じの衝撃を受け、それを出せたらと思つたそうだ。実際に高校生たちは、

被爆者の体験したその場に何度も足を運んだり、家族や友人にモデルになつてもらつたりしているという。その場所で自分自身の情景を見ているような感覚を持つたという。

(2)（能動的受動性）自らの枠（想像力）を超える他者の体験を能動的に感受しようとする、対話的相互行為の積み重ね

今まで平和学習で十分原爆について理解していたつもりだったけれど、いざ証言者の方と直に話してみると何ひとつわかっていなかったことを痛感させられたという高校生の感想もあった。先生は被爆者の話をた



だ受動的にきくだけではダメなのだと言う。だが、自分の枠の中だけで能動的になって、それに当てはめようとしてもダメなのだとも。

自分の枠を超えるものを受動しよう、積極的に感じ取ろうとすることで高校生たちは被爆者の体験に近づくことができるのだという。

(3) 事実から経験へ。「事実より先に来るもの」として生きられる経験。

ある高校生は「事実に合わせてよという気持ちよりかは、自分の感覚を大切に描いていったら自ずと事実に近いといくとする(中略)その時の気持ちみたいなもの、事実とかよりも先にこう大切にするとどうか、感情とかを。」と話した。

被爆者の記憶という事実ばかりを追い求めて、その記憶を描こうとするのではなく、事実を体験した被爆者の思いや感情をきいてきいて受け止めた高校生の自分自身の思いや感情、その両方が合わさっていくイメージだと先生は言った。

(4) モノから人へ。「怖い」「グロテスク」から「苦しい」「つらい」「悲しみ」「憤り」へ。

原爆、戦争を怖い、グロテスクと捉えていた生徒が証言者の話をきくことを重ねるうちに、相手の苦しさやつらさ、悲しさ憤りなどの感情を思っで描くように変化した。

人々の絵も、想像力が足りずモノのように描いたけれど、一人一人にそれまでの人生があり苦しみあるのだと捉え方が変わってきたという。

(5) 自らの想像力をはるかに超える他者からの呼びかけを感じるなかでの(深い)主体性(知ろうとする主体(関係する自己)の生成(能動的受動性)による(受動的能動性)の生起。

生徒たちは自らの想像力を超える他者からの呼びかけを受け止める中で能動的に自分を超えるものを知ろうとする主体、あるいは他者と関係しようとする自己が生み出される。

初めは作図意識が強かった生徒が、この体験を通して絵がうまくなりたい、被爆者の手となって描きたい、圧倒的に能力が足

りないと痛感し、これは彼の生き方を変えることにもつながった。

他者に呼びかけられた自己は、未知なる他者の経験を能動的に引き受けよう、知っていかうという新たな主体性の展開に向かうと先生は語った。

(6) 堆積し濃密になっていくものとしての記憶と歴史

原爆を体験したことのない生徒は原爆の絵を引き受けてから、なんども自分が絵を描けるのか、描いていいのかと葛藤した。しかし被爆者との対話を重ね、絵を描き直して表現しているうちに「受け止められた」「受け止めよう」という感覚が芽生えた。

その生徒は相手の思いと自分の思いをどんどん重ねて言ったら、証言者以上の重さがどんどん増していくという思いになった。原爆の絵を描くことで出来事を希薄化するのではなく、濃密にできるのだ。

その出来事の感情が自分の中で、そして絵の中で堆積していくと生徒はインタビューで語った。

3. 継承とはなにか、体験の非共有性はいかに乗り越えらるのか

原爆を体験したことも見たこともない高校生が、なぜ被爆者がリアルと感じられる絵を描けるのか。それは高校生が自分の感受性の枠から出て、被爆者の生きられた経験と「出会う」という生きられる経験をしているからだ。

被爆者の生きられた経験と「出会う」ために能動的に受動することが重要だという。これにより自己の切実な主体化がなされていき、生き方としての継承へとつながる。

高校生たちは対話の積み重ね、絵具を塗り重ねながら被爆者の(生きざま)を継承している。

「継承」とは、単なる事実のコピーでも伝言でもなく、出会いと対話の堆積であると先生は話す。

被爆者の出会いと対話のなかで、生きられた経験を重ね合わせ、過去の出来事に新たな意味を付け加え、その重さを増していく。そこに「体験の非共有性」を乗り越えていく契機があるという。

文責：H・Y

### 参加者の感想

・この場所から自分がスタートして、また時に戻ってこられる。その幸せをしみじみ感じています。小倉先生の話も劇も歌も先生のメッセージもどれも心に深くしみいるものでした。

・ひさしぶりに「ぬくもりほっとらいん」の温かくて誠実な空気に触れ、嬉しく、懐かしく思いました。傾聴電話を続けることの尊さ、社会の中の意義を改めて感じました。このグループにかつて在籍していたことを幸せに思えるような今日の記念式典でした。

・小倉先生のお話、興味深く聴きました。深く聴くことで話し相手と共に行けることができるのは傾聴と同じだなと思えました。お会いするぬくもりの人たちはキラキラしてました。今日参加できうれしかったです。

・出会いと対話の堆積で自分もつくられていると

思いました。ぬくもりには沢山の出会いがありますね。

・このような会を採めることなく行えるぬくもりは本当に素晴らしいところだと思えます。小倉先生のお話も、シャンソンの「生きる」力強い生命の息吹きに感動しました。皆が温かく、優しい、とても居心地の良い場所。ぬくもりってこういう所なんだなあと改めて感じました。20年間、みんなのバトンが繋がって、そのバトンをつなぐひとりとして、この活動を続けて行けることを誇りに思います。

・20周年記念の会の準備も当日も、ぬくもりのメンバーがそれぞれできることを行っていたなあと感じた。担っているものは違うけれど、できることを行い、お互いそれを認め合っている。やっぱりぬくもりはステキな団体だと感じた。今は受け手を離れた懐かしい顔が多くあつて、みんな傾聴を大切にしているのが伝わってきた。

# 出張講座

## 習志野市 母子保健推進員 傾聴講座

11月12日、習志野市の母子保健推進員の皆さんに習志野市保健会館で傾聴講座を行いました。

母子保健推進員というのは、市から委嘱を受けた地域の先輩お母さん方で、生後2か月児の訪問活動をして母親の相談相手、また行政とのパイプ役にもなり、母親が安心して子育てができるように活動している方々です。



会場には推進員と職員の方々、30名ほどの参加がありました。講座は1時間半の中で傾聴の基本の講義と2回の実技という盛りだくさんの内容です。

まず、傾聴では自分と違っている相手の身になって話を聴く。励ましや慰め、アドバイスをしないで相手の気持ちを聴く、など基本的な講義を



「活動中に聞いた話を引きずってしまい辛くなるが、どうしたらよいか。」という推進員

また事前打ち合わせで出た

しました。  
その後のロールプレイはグループに分かれて、話し手、聴き手、観察者と役割を交代して行います。  
「育児不安が強い母親」や「上の子に怒ってしまおうと悩む母親」などの役としての話を傾聴する体験です。終了後に観察者の人からは良かった点などを伝えてもらいグループで学びを深めました。



の方の疑問については、電話相談の経験を参考に、聴き手側のケアとしてお伝えしました。

後日に伺った受講の感想には、「『早わかりをする』をやってしまいがちなので気を付けたいです。参加してよかったです。」「自分のことを話しがちだが、しっかり相手の話をまず聞かなければとあらためて思いました。」「ロールプレイは難しかったがとても良かった。役割を変えることでたくさん勉強になった。」「などの声が寄せられており、一安心しました。

今後母子保健推進員の皆さんが傾聴を生かして沢山の家庭を支えていかれますようにと願っています。また、職員の方には事前の打ち合わせから当日のサポートと大変お世話になり、とてもありがたく思いました。

今回の講座を担当した経験や反省点を次の機会に向けて活かしていきたいと思えます。

## ぬくもりほっとらいん インフォメーション



「NPO法人傾聴グループぬくもりほっとらいん」ではこの会の目的に賛同し経済的支援をしてくださる個人・団体を随時募集しています。

- 団体主催の講座のお知らせ・広報誌等をお届けいたします
- 会費：1口 1,000円（1口以上）  
払い込みをもって受付とさせていただきます
- 振込先 ゆうちょ銀行  
口座記号：00130-8 口座番号：373192  
加入者名：NPO法人傾聴グループ  
ぬくもりほっとらいん



「NPO法人傾聴グループぬくもりほっとらいん」は傾聴を基本にやさしい社会づくりを目的として「電話相談」「学習会」などの活動をしています。

事務局：千葉市若葉区桜木北2-26-30

TEL：070-4369-7269 FAX：043-214-8397

ホームページ <http://www.nukumorihotline.org/>

### 編集後記

記念動画用のメンバーの写真は皆さん素敵な笑顔を見せてもらえた。ぬくもりの♡ハートがそのまま表情に表れ優しく温かい笑顔だ。

ぶれす用の写真は後姿が多い。こんなにきれいなメンバーと一緒に活動していると嬉しいな。 (N・Y)